

奈良時代から平安時代の火葬墓の出土状況

北条遺跡

(その二)

周溝内から出土した遺物から推定すると、一号墳、二号墳が造られたのは五世紀末ごろ、三号墳は六世紀末から七世紀初頭と考えられます。奈良時代から平安時代の遺構では、火葬墓が

周溝内から出土した遺物から推定すると、一号墳、二号墳が造られたのは五世紀末ごろ、三号墳は六世紀末から七世紀初頭と考えられます。奈良時代から平安時代の遺構では、火葬墓が

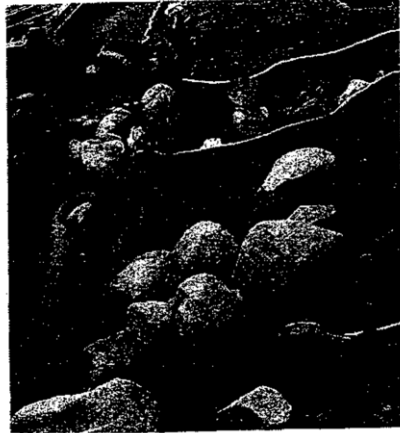
日本では火葬が行われるようになるのは、八世紀になってからのことで、市内では太鼓山遺跡でも、同様の火葬墓が見つかっています。中世から近世にかけての遺構には、土坑や溝が検出されています。土坑内には、土師器の小皿が数十点入っていました。このように当地では、時代は移り変わりますが、現在に至るまで人間の営みがあったことを物語っています。

他に出土している遺物は、円筒埴輪片、須恵器、碧玉製管玉、石棺の破片など、古墳と関係のあるものが出土しています。

北条小学校が建てられる際にも、工事中に古墳の副葬品と考えられる六世紀後半の須恵器が出土しており、同じ丘陵上に古墳がいくつか造られ古墳群を形成していたものと思われれます。

城ヶ谷遺跡

(その一)



検出された中世の杭列と溝

城ヶ谷遺跡は、昭和六十三年に四條畷学園短大校舎新築工事に伴い新しく発見された遺跡です。遺跡のある場所は、北条四丁目の山手運動場の北側、標高約三十メートル

の丘陵地です。調査の結果、中世の遺構や、二基の古墳(城ヶ谷一号墳、二号墳)が見つかっています。

中世の遺構には、東西に走る杭列や溝、井戸な

どがあります。建物の跡は見つかりませんでした。ここにそのころの館があったと思われれます。中世のころの大東は、どのようであったのかよくわかってはいませんが、ふもとを通る東高野街道の街道筋にあり、交通の要地であったことでしょう。

背後にある飯盛山には、中世からの山城である飯盛城がありました。

城ヶ谷遺跡で見つかった杭列や溝、井戸などは、飯盛山城を守るための館に伴うものかもしれません。

中世の館というのは、日常の生活をする場所だけではなく、いざ戦乱の時には敵の侵入を防ぐ、城のような性格がありました。

「城ヶ谷」という地名からしても、ここに、そのような城があったのかもしれない。